

日本書紀傳 卅一卷_七

百二十九

和書
一〇五二二號

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (138)
函號	特85 1

内一六八三號

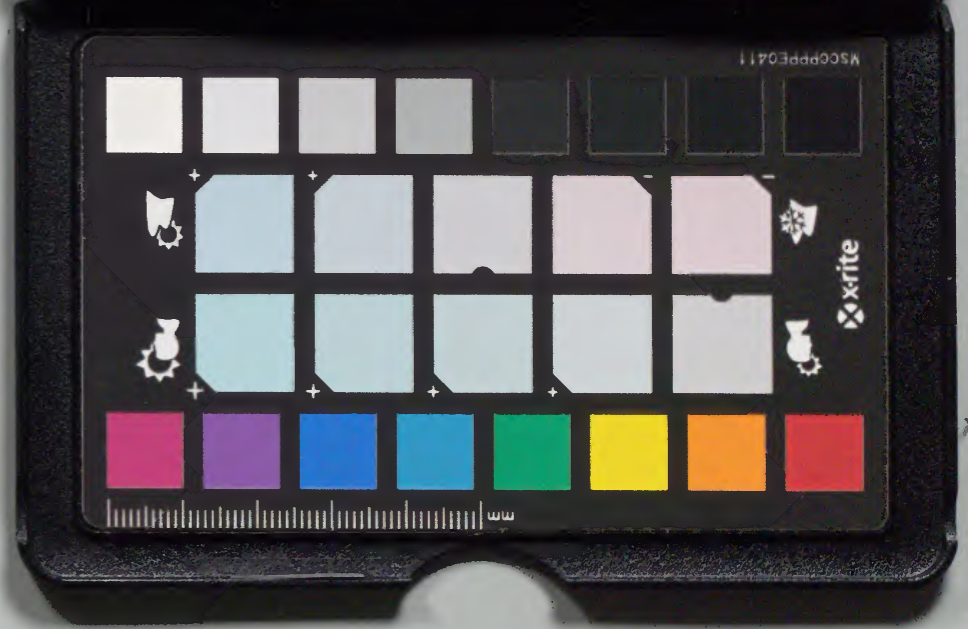


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



教部省
文庫印

圖書
印

南政官
印

乃彼天鈿女命の草纏之類を持し其狀小異なるが石
三百二十丁 小云り九十八持統天皇元年御紀小三月乙丑

朔甲申以草纏進于殯宮此曰御蔭同二年三月己未朔
己卯以草纏進于殯宮と有る後小謂ゆる花 鬘の類

あるが此ハ奉ると自著るとの差ハ有る小ども彼天鈿
女命の以天香山之真坂樹為鬘と有小類たり十小ハ

此の曰ハ八夜啼哭悲歌を古事記小ハ日八日夜八夜以
遊也と有る即歌舞を奏せるあり彼石戸段の神樂の

状小少クも異なるがざる事石小條とありて注るか如
く如此く奇しき迄天石屋戸の神樂と此殯礼と相異

内一三六八三號

先是天稚彦在於葦原中國也

るゝざる者とい云あり
又人の墳墓を万葉あると小奥
津城の詠り然るを神樂歌
小於支川支仁須免加美多知遠伊波比古之古呂八
伊万曾多乃之加里介留と有ハ神社を云ある由ル己
小傳十九卷四百下小注せり又石の石隱の事小就
こ思ふ小万葉二卷小鳥物朝立伊麻之立入日成隱
去之鹿齒三卷小足日本之山道乎指而入日成隱去可
婆と有ると何れも挽歌あるハ其事を思寄せたる小
や右件上古の喪礼ハ悉く石戸段め神樂の狀ハ
似たり然れども神宮の忌詞ハ死を直々と云ひ墓
を壞じし云云様させ給へる計り皇太神の惡事ハ御
在し坐す御事ハ在けり如何程神事ハ似たり其木
ハ一ありて清濁を以て如何ハ相混れり事ハ得
む古書を讀む事の委しうざる時ハ大なる物損ひ
を爲る者不深く
忌慎む可き者あり

與味耜高彥根神友善

味耜此
云姪臆

須故味耜高彥根神昇天吊喪

時此神容貌相類天稚彦平生

之儀故天稚彦親屬妻子皆謂

吾君猶在則攀率衣帶且喜且

勤時味耜高彥根神忿然作色

曰朋友之道理宜相吊故不憚

穢遠自起赴哀何爲誤我亡者則

拔其帶劍大葉刈刈此亦名神戶劍

以斫休喪屋此卽落而爲山今

在美濃國藍見川之上喪山是

也世人惡以生誤死此其緣也

味耜高彥根神と一も聞えさするハ天下造く一ハ大
己貴神の珍子と御在ー坐すさへ有ハ殊ハ長子ハて
渡くせ給ひ御父大神と共ハ天下を造くせ御在ー坐
て御功業の大小御在ー坐す御事つーハ聞えさせむ
方無く勝れて尊き大神めて渡くせ給へらハ御紀ハ
其御事跡としてハ一たハ傳つーず唯此天稚彦の喪を

吊りし御在り坐り事件のこころ其傳の懂懂存れ
りけれ此小其御名の出たる唯明友より善し
き御因ふ依て此小訪ひ御在り坐りありとも天稚
彦神天神小對ひ奉りて畏まり有て誅られ奉り
身ゆい在けれ死後の交り迄をも能為させ給ふと
雖も私の御行小過させ御在り坐ざりけれ然る時ハ
此神の御功業と申す者ハ一た小無りけれ其惜
りとも何とも云ひ方無き御事小あり御在り坐け
る故紀記の二典を讀奉り大なる疑を生生可き事
こころ有けれ此ハ味耜高彥根神の出給へめと雖

も余事小近き者あり此神の全体小係て見奉り
まじりけれ此章の中小最も重事と申せるハ天神
より經津主至神武瓊瓊杵神二柱を天降し聞えさせ御在
り坐て其御父大己貴神小天下國土を避奉りて給ハ
しや否やと問聞えさせ給へる主と有る御事あり
小其時ハ事代主神小問御在り坐て御對を奉りて
給へり古事記ハ今一柱建御名方神の出て拒拒
申さる事有と雖も其大神御父より亦我子有建御名神
除此者無也と申給ひて僕子等二神隨白僕之不違と
申結ハせ給ひて御兄とも申す可き味耜高彥根神

と云事ハ一言たふ宣ハする御事の御在り坐ざるハ
 何れとも意を得ざる事あるハ非ずや又出雲國ハ大
 己貴神の御本國の事ありけり風土記を見よ其御子等の御事跡
 も形の如く傳りてハ有らざる事代主神と申す事
 ハ一たふ傳りてハ神社よすく唯此味耜高彥神の
 有るこゝ疑を更ふ増べき種つひハ在けれ此を以
 て其説の苦く成ふ至めてハ唯闇推ハ御同神或ハ
 亦御名と云事ハ片付るのこゝも説得たる者の如
 くハ思ふ事とハ成りけり但味耜高彥根神と事代
 主神とを同体異名と爲
 るをむしりて非ず其説の據る所を委しく爲ざる事
 ををしむるあり又播磨風土記を見るハ大己貴神及后

神御子神等の御事跡ハ於てハ出雲國ハ亞てハ其國
 小多在るを味耜高彥根神のこゝ有て事代主神の出給
 ハざるも又不審一其ハ予慥ハ見定めて己ハ傳十
 三百七十五二百三十三 四百九十三 小注一奉りるか如く
 味耜高彥根神と聞ゆるハ御本名ハ御在り坐て即御
 父大國主神ハ對ハせ給ひ其和魂をハ事代主神と申
 して大物主神ハ對ハせ御在り坐一其荒魂をハ一事
 主神と稱へて大國魂神ハ對りて給ふ御名ハ
 己渡りて給へりけり如此く見奉り以行々時ハ紀記
 ハ更ふも云ず其餘の古書ハ且りて御事跡の多く見
 えとて給ふ事御功業の火ハ渡りて給へり由鏡ハ係

見るか如く悉小明の奉り知るる事ありけり然
して此小天稚彦^{神の}の喪を弔ふ御在り坐けるハ唯
其善いしき御朋友の中しひのしめてハ御在り坐す
一ハ其御妹下照姫命の爲ハ夫神ハ坐れハ其御
睦じハ御在り坐べく傳十一^{四十} 廿二^{百七十} 三十五^百
七十二^十 十^十 注るか如く此神の后天御糺日女命亦
二十九^丁 名天津羽と神と聞ゆるハ天國玉神の御女ハ坐ハ
天稚彦神ハ此神の爲ハ婦兄少て坐セハ其弔ふし
聞えさせ給ふ所以此ハ在る事ありと知べし石の如
くして天津羽と神ハハ此味耜高彥根神と申す方

の後神ハ渡りセ給ふ故ハ續後紀ハ三島大社本
后也マ所見たり其御子五柱渡りセ給ふ由同書ハ見
えたるか物忌奈命と申すハ同御記^紀ハ見えて伊豆國
賀茂郡の式社あり出雲風土記ハ見えさせ給へるハ
多伎都比古命鹽治昆古命ハ有のも此三村^柱より外ハ
御名の傳りセ給はざるあり甚惜しき御事あり
ける此等の御事ハ己ハ傳三十^{千三十} 四^丁 委^ハ注^ハ
奉りハ今云ふ限ハ非ずと雖ハ此御紀ハ然計り
尊く御在り坐す味耜高彥根神の御事の委^ハ注^ハ
るハ遺憾しとて少く注^ハ奉るのハ此ハ盡せらる者

此回上在て不忠也
さふ一祈るの世に
けり時ふい唯ふ
有

と思ふ可くならず 但先ふハ天稚彦との書して命と
て天稚彦神と書るハ味相高彦根小對へたれハあり
然れども天神小對へてハ不臣の神ありハ然ハ云難
けれハ何れもてハ天稚彦とハ書せり其罪を攻ると
尋常の事を書すとハ其罪正副を立る文法あり人訶
り事 先是天稚彦在於葦原中國也云々と云ハ天稚
彦の喪を天上ふて行ふと云ふ前文の擧戸致天と云
を立て天を主と一地を客として先の事を語出る支
ある物く上二百九行ハ小注ハ注るハ如く傳の誤る
るめて古事記の趣ハ眞正正きを得たりける第一
一書も前ふ將柁上上於天而於天作喪屋殯哭之と有
小照一應せて又右の如く書されたれども其事跡

ふ合ハざる者有り其ハ此御父子神共本よめ天神
の御爲ふ異異しき心ハ御在在し坐坐ざるが未國を避奉
りて歸順ハせ給給はざり一以前の事あり然る云義を
措て私事の爲ハ如何如何クも天上ハ昇昇らせ御在在し坐
へき若其を犯犯し給給はざりハ其事小就たる御咎め
小ハ遇奉奉らせ給給はざるとも甚甚と无礼无礼げある御事小
佗神ころハ有れ此神小限てハ爲させ給ふ可き小非
ず且此小則拔其帶劍大葉刈以斫斫仆喪屋此即落而爲
山と云事の如きハ彼手カ雄神の天岩戸を取て抛下
し給へるとハ大小別ある事小其天稚彦の親族の

神等の爲小怒らせ給ふとも天神上對へ奉りてハ甚
トキ御荒びと云物シテ素戔鳴尊の天をトキ扇トキ一國を
勤トキ一給へる小幾等々各り給へりける此即天上小
この御事あるよりトキ証あり又右小注々々如く御
本体と和魂との異ハ有る事少く在れども此第二一
書小是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合ハ
十萬神於天高市師以陳其誠歎疑之至と見えたるも國
土を避奉らせ給へる後多りける者をや此を立る時
ハ此と第一一書と小味詔高彦根神の天上へ昇らせ
給ふと云ハ非あり若其非ありと爲る時ハ先小舉戸

致天と云車の非ある事自然小知るるめり是御紀を
以て御紀の混れを正す法あり他書を以て正史を駁
するといハ雲と混との差あり小非すや然る時ハ此小
構ぬる趣ある傳説の起り一基トキ一も喪屋を天上小
天の下小辨へたる如く疾風神をして其戸を外小移
さしめたるを常小顯國少て爲さトキ一事あるが故小
天上へ送り一めたる者の如く傳へたり一者少て古
傳とい異ハあり一傳傳正書を簡易小記る事主と爲
る所見たり
く此たる故小省く此なり此の條を畢たる所小第一
一書小時味詔高彦根神光儀花艶映于二丘二谷之間
故喪會者歌之曰武云味詔高彦根神之妹下照媛欲令
衆人知映丘谷者是味詔高彦根神故歌之曰河妹奈屢

夜乙登多奈婆多迦汗奈識勢屢多磨廻弥素磨屢廻阿
奈陀磨波夜弥多尔輔拖和拖邏須阿泥素企多加遊顧
祢又歌之曰河磨佐箇屢遊奈覺謎廻以和多邏素西渡
以嗣箇播箇拖輔智儀々々々尔河弥播利和拖嗣妹盧
豫嗣尔豫嗣豫利儀祢以嗣箇播箇拖輔智此兩首歌辭
今號夷曲と見えたる是が愛なき傳ふハ在を同一事
の重なるを厭ひて此ハ略られたりつる者あり諸
今此を正して云く予一箇本を持るハ古き校合有て
右の武或云以下云々の傍ハ官本小字の四字を畫入た
り此ハ訖て思ふハ其下照媛命の歌の本行と成ゆるよ

り又歌之曰の四字を畫加へたる者あり次のハ下照
媛命のハ非ざりけり然ハ故喪會者歌之曰或云
高彦根神之妹下照媛味紹
云々故歌之曰云々河磨佐箇屢遊奈覺謎能云々
有しよて此歌ハ喪會者の歌めて下照媛命の歌へ
ハ非るや云ハ天放鄙女とハ下照媛命を任たるあり往
爲渡迫門ハ此女神の御兄を伴ひて渡給へるあどを
見て云るあり石河片瀾洲々々ハ其迫門を云るあり網
張渡ハ鳥網張渡したるありて彼衆鳥を捕ハ網任を其仕
ハ打捨置たる現在の状る可ハ目縁尔縁寄来祢と
ハ其女神の伴ひ給へるを天稚彦神ありむと夫天すり

降るれし神等の見て詠るあり然見る時ハ下照媛命
の欲令^{衆人}知^ト映丘谷者是味耜高彥根神故歌之曰と云意
も大^ト通^トゆる者あり但其官本と云も本書を見ざれ
ハ知べりらずと雖も良海本ハ一書ハ皆細行ある
おし此の如く書續けたるハ官本と云ハ中古ハ誰ハ
心著て書改めし者ありしハ又歌之曰と續けたるハ
誤あり若然有ありハ故喪會者歌之曰と先ハ在る
文ハ衍物と爲ふ非ずや然れハ實ハ是予載の誤と云
物あるを誰一人昔より正し續たるハ之無ハ如何ハ
りける事ハ記傳十三^{五六}ハ引收たるハ弔ハ石ハ

官本ハ依て試ハ正し書たるハ同し然る本の有
り大人の訂正されたるハ知されども實然有る將
欲き所ある者なり但右の歌を^{下照媛命}の歌も大
書として此阿磨佐箇屢云々の次ハ置がしてハ叶ハ
ざる事右ハ注り如くあるを或云の二字良海本ハハ
一書云と作れども共ハ削^去云て宜しき所の状ある者
あり古事記ハ故阿治志貴高日子根神者忍而飛去之
時其伊呂妹高比賣命思顯其御名故歌曰云と書續
けたるハ宜し然れども此より先^後ハ今一首の歌を載
たらしハ如何ハ愛なき事ありし然して上
百

十五丁二百 小注るが如く此時の殯所の飛彈國荒城
九十五丁 郡荒城神社の地と思しき其神社を今河伯大明神
と申して吉城川の側官地村小在りと云北右の石
河片淵と詠る其川を云ありとも思合する事
あり 猶其喪會者の詠る天離鄙女の哥本少下
照媛命の末ありと云ハ其終小此丙首歌辞
今号夷曲と書され古事記ハ今一の哥ハ傳ハ傳ハ傳ハ傳ハ
るありハハ此歌者夷振也と云結めたるふて知べし
其哥句の避奈より夷曲と云曲名ハハ成れる者をや
○先是ハ其味耜高彥根神
の天稚彥神の喪を弔うせ給ふ所以を述るあり○在
於葦原中國と云ハ天ヲ致して其此ハ天上ハハて殯を行ふ狀ハハ書せ
る所ありハ却るあり小此國を容小為と書る文ありハハ

るの○味耜高彥根神の御名此小始て出たり御名義
ハ傳三十五百七 小注一奉ハハ今云限小非ず此大
神の亦名大山咋神山末之大主神別雷神と申して
國土經營の御車小大ある御功坐る由ハ己小説るを
世人の日毎小恩頼を蒙奉り居る事を知ざる物あり
有ける其ハ食鹽と炭アラスミとの二小て一日片時も致べし
くざる重寶是あり其ハ得傳三十千六十 小注るが如く
神名式小謂ゆる陸奥國志波彥神社名神風土記小監
竈神社名神大所祭鹽土公羽也と見えたる是あり和漢三
才圖會小此鹽竈神社を祭神一坐味耜高彥根命相傳

當社明神始燒鹽と見えたり是鹽彦神と御名小負て
る所以るゆ又栗原郡志波姫神社名神即鹽姫神と申
付御事と聞ゆ此其後神小御在坐ある可し又白
川郡都古和氣神社名神を頭注小味和尙彦根命
と有又石都古和氣神社と申す其同神とて渡
り世給へき事申すも更ある小白河故事考と云物小
在石川郡須釜村俗曰ハ幡祭神高彦根命神主所傳記十此
神始て炭を作る事を人々小教給ひし事鹽竈明神の
鹽を焼く事を教給ひし同ト同村大安寺文書あり
此此の趣見ゆ大安寺永和三年文書小陸奥國炭釜云々と

有山と云るを見れば味和尙根神其地小御在坐
て始て炭竈を起させ給へるありけり今世中亦普
有来る事少く見たり知たり然計り纏つけある事
とい思えぬ物々其始て製の試させ給ふ迄ハ
何計り御心を凝させ御在坐けむ今想像り奉るた
小甚可畏くあるむ有ける凡天下小在ゆる万国と小生
こし活る人小して火食を爲る限ハ此鹽と炭とを一
日として用いざる時有べうずあるむ有ければ知ず
くも其御蔭を蒙り奉る事こそ甚辱なき御事ハ
有ければ世の學者神代小斯まで國作の御力を遠く布
せ給へるあると云事ハ且ても知ず陸奥出羽

の國と一云へば悉く夷地と在り物の如く云めり
ころ凡てハ車小暗^ホ故^コ知^チあ^アグ^ク末^マを^ヲの^ヲ捕^ツへ
て本^ヲを失^ハへる^ル ○善友ハ私記小與支止毛奈利支又宇
留波之加利支と許^註此も第一一書あるこの今本の
訓ハ二字を引合せて宇流波斯あり(中)金澤本小ハ私
記の先あり訓を用いたりき神和皇后元年御紀小
竹祝與天野祝共爲善友小竹祝逢病而死之天野祝泣
血曰吾也生爲交友何死之無同死乎則伏屍側而自死
仍合葬焉と有る善友をも交友をも宇流波斯伎登母
と訓の又此下小朋友之道宜相吊云この有る古事記
小愛友故吊来と有る愛友を記傳亦然訓れたれば此

も善志^新伎友那理伎と訓へ此ハ多く男女の間小云
ハ更^ハ小^テ明友小も云ひ又下ある人を恵む小も云言
ある由ハ己小傳十^{六十}十五^{九十}あも云り此あるハ
記傳十三^{六十}十^{四十}小伊物語^四六^段小昔男其善^ハき友有
けり片時去ず相思ひけるを人の國へ行けるを甚哀
れて思ひて別れ^ハけり云と有り凡て友の交りの
睦^ハよ^キをハ宇流波志と云(けり)万葉十八^{十八}小伊
末能麻左可母宇流波之美頼禮と詠るも睦トく交ハ
るを云り俗小云ふ中の善あり偕此二柱神の交遊ハ
天若日子の此國小降^降りて後よりの車ある可一書紀

の趣も然聞ゆ下照比賣の母兄神イロヒ小坐せば由縁も甚
親イきあり帳小出雲國出雲郡阿須伎神社同社天若
日子神社同社阿邊須伎神社同社天若日子神社と並
び載りめと云れたる實小然る事少て此二社柱の御睦
ハ此上益く御在イけしイ諸如此同ト神社小同神の
相並イづイつイ二所御在イ坐ハ格別ある御親イと小
て渡イせ給イふが故ある事ハ今更小申すも更ありと
雖も其天稚彦神の生平イしイ時の御魂と身没イれし
後の御魂とを合せ祀るか故ある小こころハ有けぬ御此
社の御事ハ傳三十卷千六十七丁小委イく注せぬ諸
人此の事を纂疏小友善謂莫逆之交也と見え正字區

小與イ久交驩日友善と有し諸天稚彦神ハイルイ已イ不
忠誠の神と成畢て止給ひしイとも此社のイるイず
上イ百二十六丁小注るが如く國との官社イても多く
祀イし給へるハ其罪ハ罪イして天神小罰あり奉
ふイこころハ有けぬ然るを今イしイて天稚彦イと書捨
て忍心有イ似たり ○昇天吊喪ハ第一書此小同ト
きを古事記小ハ此時阿治邊志貴高日子根神到而吊
天若日子之喪時自天降到天若日子之父亦其妻云々
と有て其小ハ天稚彦神の父妻共小天降給へる趣ふ
るを此ハ味相高彦根神の天上へ昇りて喪を吊給ふ
由ありて反對ある事共あり其辨ハ上小條イ注れハ
今ハ唯其心イしイ見る可きあり 諸登布哀布ハ俗小見

今記傳十三條... 加本訓... 加本訓... 加本訓...
 加本訓... 加本訓... 加本訓... 加本訓...
 加本訓... 加本訓... 加本訓... 加本訓...
 加本訓... 加本訓... 加本訓... 加本訓...

和 容

おと云車あて常の時の少も病者あてを尋ぬる小
 も死人を訪ふも忌中を行見らるる又後世の車小
 云るハ今も俗小云て彼世の安く有れク一も顧と扱
 ろふ義あて本問の言小同ト古今哀傷小思ひ小待
 りける人を弔ふひ小罷ゆて詠る又後撰哀傷小人の
 弔ひ小詣来りけりふと有る此の弔喪小同ト
 然して此言ハ本ハ唯の訪ゆり出たるガ登布良布と
 云時ハ其意薄く厚く成て能く顧と扱ろふ義と成ル
 る者ト
 ○容顔ハ第一一書ハ形顔と有る小共小加
 多知と訓り海宮遊行章第一一書小有一貴容骨法非
 常あて見えカ葉五三十三ハ漸々可多知都久保里十六

九小顔所見哉我藻將依古今ハ形ハ深山隠れ
 の朽木る心ハ花小成さハ成るハ伊勢物語二ハ西
 京小女有けり其女世人ハ勝れけり其人形ゆり
 ハ心あい勝りたり又六形ハ甚愛たく御在一け
 れハ源氏桐壺三ハ画小書ハ揚貴妃の形ハ三十一
 下小形らハあれど橋姫ハ甚如此雅あるを
 見捨む後めたハ計小あひ得頼ハ形をも易ぬあど
 隔毎く物語ハ給ふあど多き語ありて形と云カ本
 ありて其形の有の任あるを姿と云ふ素形の義あり此
 素ハ音訓同意あるを徒手徒跣あど須小同ト又

加多知と云時ハ形立少て其形を成せる状を云少て
本ハ加多の言ハ起れる者あり然して男女共ハ其形
と云り其ハ祢る時ハ限れる事少て空徳國讓卷ハ如
此不用ハ仕成ハ給へるハ如何かとて隠れ給ひハ
ト見奉りハ皆形人ハ初秋上ハ此頃ハ甚
愛なき形の盛なり父大臣然る形入少て列ね參給ふ
ハ桐壺ハ后宮の姫君云々難有き形入少るハ
榮花根合ハ俊家の中納言甚花ヤリハ清けハ形人ト
見え給へり堀河の大殿こりハ形の名取給へりハ
ハ此殿原ハ甚如此物爲給ふ可ハ有る是る
○正ハ私記ハ末左ハ有りと雖も金澤本ハ麻佐
志久ト有ハ棟ベハ此言ハ傳十五二百四十八二十
注せり○生平ハ私記ハ伊介利之ト見えたりハ古
本及金澤本ハ伊祁理志登伎能ト有ハ從ふ可ハ四神

出生章第九二書ハ伊時諾尊欲見其妹乃到殯歛之處
是時伊時冊尊如生平出迎共語ト有ハ生平ハ然訓
たろを其を如生平私記ハ伊岐太里之止支乃ト注ハ金
澤本ハ伊祁多理志賀其登又伊祁理志賀甚登又
あども訓ハ但其大神を崩御トせ御在ハ坐す状ハ傳
の誤る由傳十二丁ハ注るハ如くあるハ字訓共ハ
此も別あるハ拾遺恋一ハ恋死ハ後ハ何爲ハ
生る身の爲ハ人ハ見將ク欲ハけれ源氏蓬生四ハ
生る世ハ然名残り毎ハ堂ハ如何爲ハ薄雲三十ハ生
る世の限ハ思ハ事残さず後世の勤心ハ任せて少

此書下四百三十一
と伊弉流比登と訓
其義小就中委しく注
す可きと見合す可
し
注

女三十一生る限の傳傳づき物と思ひて云くあると有る
伊弉流小同トくして俗小云ふ存命の内又ハ存生の
内又ハ在世の時ある云小異るす。○儀を與曾保比
と註り私記小ハ加多知と有れども右小云る容貌と
同くしてハ如何なり第ラ一書小光儀と有るハ金澤
本小與曾保比と有る依て此も然定めり崇神天皇十
年御紀小倭迹ミカハ姫命語夫曰君常晝者不見者分明不
得視其尊ミカハ願暫留之明且仰欲觀美麗之威儀ミカハと有る
尊顔ミカハを美加保と訓て威儀を美須賀多と訓て其小對
へたり然る小允恭天皇白皇八年御紀小妾常近白皇正宮而晝

夜相續欲見陛下之威儀と見えたる其小ハ威儀を美
與曾保比と訓て此小等一きを此言ハ一佛定石哥
小多麻乃與曾保比於母保由留可母美留期止
カ如く身を装束九車九起りて源氏少女九小中官
の装束九殊九あて参り給へる小若菜下九小各詠九
一九く晝九したる装束九い九ども云九と有て身九の飾九の整九ふり
状九を云ある九ハ凡て入九ハ威儀を取繕九ひて形容を成す
者あるハ轉九して須賀多も云車小用へるあれハ此ハ
此訓小従ふ可九く所思九えたる私記小加多知と訓九
も上ある容貌九と同ト訓九よてハ儀字九を用ひ九ハ其九たる
詮九益九小似たり又須賀多も此九を訓九べけれども其ハ

崇神天皇御卷小
 至て説べきあり ○類ハ私記小ハ太利と訓く第一ノ一
 書小時此神形顔自與天稚彥恰然相似と見え古事記
 小ハ此二柱神之容姿甚能相似と有を見る小ハ其容
 類顔のもあらず光儀あらず實小同ト神と混じ計小能
 似させ給へるありけり應神天皇九年御紀小有壹伎
 直真根子者其爲入能似武内宿禰之形中且時人毎云
 僕形似大臣雄略天皇九年御紀小臣觀女子行歩容儀
 能似多天皇と有り右の似字此一書あるハ能礼理き訓
 て次の三ハ多宇婆礼理と訓じ習ふてハ在れ七七刀
 葉二三十八ト小玉樟道行入毛獨谷似之不去者三四十七ト小

河風寒長谷乎歎年公之河流之尔似人母逢耶七三十三
 小於君以草登見從十九二ト小妹尔似草等見之欲里
 尔能礼理云事小云る小多く似を示と云る是本謂語あり
 之能知ハ似爲あるを那須と云ハ堅石尔常石尔あらど云
 ハ辞の尔小非ずして如堅石如常石の義あるを其知ナ
 をハ山振の句ハる妹黒髪の乱れて今朝ハあらど云が
 能も辞小非ずして如山振如黒髪の義ある小等一く
 尔礼理と云も能礼理と云も同義の言ありけり又多
 宇婆礼理と云ハ多麻波礼理の音便して下る人の
 我のりハ上る人小似たりけりを似ると云を憚り

て其容儀を賜りける意を以て云ふて似字との係離
れたる事（ある者）を以て云ふり賜りける多字婆理と云ハ大和
の事云々神卷小官の御多字婆理少て必有へき加
階た小爲す勾官小御多字婆理の加階あるをさへ云
るるど見え○親屬私記小字我良也加良と有る依へ
たる是あり（頭宗天皇前御紀又）天武天皇八年御紀小親族も有る同訓ありはる
り四神出生章第十書小旗此云字我邏と有る御夫
婦の御間互小詔給ひ交させ給へる由傳十三（十）注
せるを今も少々云ハ字我邏小安閑天皇元年御
紀小武藏國造笠原直使主與同族小杵相造國造皇極
天皇三年御紀小山北背大兄遂率其妃并子弟等得間逃

△空徳宗使小益長
二度トシハ一歳開
人ハ族ハ他ハ族ハ
歳トシト有るト父
母ハ并ト依加遷
ト云状あり信右
ト引る

出齋明天皇（五年）御紀小高麗畫師麻呂設同姓（姓）宿於私家小
同族をも子弟をも同姓をも訓り又夜加良（羅）の例ハ
景行天皇御紀小四十七年小取石鹿文（中）悉集親族而欲
宴之と有て下小悉斬其黨類と見え其四十年小是
身毛津君守君二族之始祖也武烈天皇七年御紀小前
進調使麻那者非百濟國主之骨旗也崇峻天皇五年御
紀小蘇我馬子宿祢聞天皇所報恐嫌於己招聚儻者謀
弑天皇皇極天皇四年御紀小漢直等控聚眷屬（ヤカラ）と有
て親族又ハ族又ハ骨族又ハ儻又ハ眷屬等の字を被
用たり其中小親族の字ハ万葉三（五）十小間故流親族（ヤカラ）

然るも第一書
妻子と有る金澤本
に夜加羅と訓る後
人の所をトて當
らざる者なり

兄弟九三十一小親族共射歸集と有る也小宇我羅と
云小用ひて有る何方小も直るを其言小の正し
差別有る事あり令條と謂ゆる父母兄弟妻子を六親
と云ぬ浪ハ宇我羅あり字書小親指族内と云ひ至親
曰親と注せる是るなり夜加羅ハ外家遠族の類を云て
字書小族外と云ひ傍親曰戚と注せる是るなり諸此の
親屬を古本及金澤本共小父母宇我羅と訓る事少
ハ在れども父母ハ己小宇我羅と云者少ハ在れハ
言の重後後れるの少て詮無し通證小親屬之謂親近
之類族也と注されハ此の旨を得られたるありて身

古事記と然るも
も記傳と其六訓
水たり源氏注引
たり親族事字
に四多引合せて
我羅夜加羅と訓
たり

一書の結び小喪會者と有ハ泛々其親族の事を云
る小克合へる者あり事を納細分つ時ハ此小て父
ども然計小云ずしても通ゆる所ありハ在り御
紀の如くハ天上あての事ありハ父母と云て有る
古事記の如くハ地下あての事と爲る故小自天降
到天若日子之父亦其妻と有て母神の降給ひハ事ハ
見えす然れハ父母
ハ賣古村母も等字小當る言を副たりハ万葉五七小父
母宇美礼婆多布斗斯妻子美礼婆来具斯宇都久志十
八二十五下小父母子見波多布力久妻子見彼可奈之久米
具之と有るど語の調小依て賣古と訓るあり又都麻
古とも訓べハ十五二十四下小波之家也思都麻毛古村毛

母が見えたり者此の謂ゆる天稚彦神の天上小遣
置て降るなりを其母子共小其神名今考ふる所毎ま
ハ惜し可し但古事記の天津國玉○吾君の身一
一書あるも阿賀志那岐と訓り私記小訓を書さず
て如字と注せらる阿賀伎美と訓むとある可し然れ
ども猶君字を志那岐と訓小受る所毎トヤハ倍崇
神天皇十年御紀小夫を勢那と訓伊勢物語十四小
夜も明けハ狐小食るて家鶏の未き小鳴で勢那を遣
つると有る夫の事を云るありハ夫君の義とウ又ハ
夫之君の轉マキとハ誰マキも思寄へき事ありハ在れども

其妻神よりマキ然も申されめ其喪小會入る神等
諸より天稚彦神をして夫と云マキ云マキ云マキ故此小其
親屬妻子より云ふ所小就て思ふ志那岐ハ主之君
と云事少源此物語ある小謂ゆる私め君私の主と
云ふ意味の称ある可し然るハ傳廿四マキ注るが
如く八島土奴美神マキ申すハ八島主之身神マキ申す義
神祇官の官主を美耶夜自と訓るどハ正マキく主と云
を志と云例少上五十六ハ注るが如く天下小打任
せて君と申奉るハ唯天皇の御在し坐て私あるハ
主従と云物あるが故小吾私の君と云意を以て當昔

然云言の有る可一其一二を云つて、三十一 伊豫介ハ傳傳づるや君と思ふる心如何ハ私ミヤウの主と
こゝ思侍める玉葛十一ハ唯某等ハ私の君と思申し
て東屋十一ハ唯私の君の如く思傳づき奉りて推本三
ハ次ハの人ハ皆私の君ハ心寄せ仕奉るる也此
等ハ何れハ我物ハ思ひ傳づる可ルなり云語るル也
此ハ謂ふ吾君ハアガヒヤキ似たり此ハ主従ハ非ハとも其被
官より長上ハ吾主と云ハ万葉五六ハ阿我農師斯
能美多麻多麻比豆と有る此等の事を思集めて今志
那岐を主之君の意ありと云ハ如何思ふる也

通證ハ出宗神天皇十年御紀清寧天皇前御紀ある也ハ
我君と有ると同じくヤ見ルハけし尊親之辞ハ憐之
称也と注されたるハ彼河賀佛尊一ハ義あるの
あれとも其と此とハ別あり又志奈幾哀君也と云る
玉木氏の説 ○猶在ハ猶麻斯々 祁理と訓て第一
書あるハ此ハ同一私記ハ只奈須奈保力之介利止
以比豆と有れども不死の字ハ每ハ只奈須とハ訓
之難ハ難も必然云ずハ聞へる所ありハ難ハハ古事記ハ殊ハ委一くして自天降
到天若日子之父亦其妻皆哭云我子者不死有祁理我
君者不死坐祁理云而取懸手足而哭悲也と有て其父
天津國玉神よりハ吾子ハ死せず有けり 宣ハ其天
あり妻神よりハ吾君ハ死せず坐けりと申され其

少しくも有め然れども然る打解け事を擬ひ物爲べ
き時の状あるのみ小く且此の衣帶を取懸ぬるハ
其親屬妻子共小舉めて爲る事あり在ければ猶字の
如く許呂毛於昆と其廣き方よ就て讀むべし良
しき事ありければ已よ四神出生章第六一書伊特諾
尊の御事あり投其帶又投其衣と見えて紐の御事御
在し坐さざるハ紐ハ御衣小著たる物あり殊小舉べき
小非る事なり此の衣帶の合せて心得べき事あり
一此二物の事ハ傳十二百三十三下小己小注せり
記傳ハ此文を引れたるハ衣帶と手足と訓れたる
然る訓の有しあり非ざるも古事記ハ合せて然訓

出雲以上記出雲郡
早賀御下よ木
枝人れ如攀引と有
依て然前にも宣し
きなり

互

此たるあり其義大に在り ○攀牽、第、一書あり
雖も字の任小訓 源氏注引たり 與違比は訓たり
與違加、理氏と訓り即古事記小取懸手足と有と同
ト事あり二分葉八十三下小伊可登伊可等有吾屋前尔百
枝刺於布流橘云々攀而手折都見末世吾妹兒又 五十
引攀而折者可落梅花袖尔古寸入津深者雖添九 十
妹手取而引與治椽手折吾刺可花開鴨十三 二 小百不
足三十槻枝丹水枝指秋赤葉真割持小釜母文由良尔
予弱女尔吾者有友引攀而峯文十遠仁椽手折吾者持
而往十四 三十 小予佐乃奈流波奈多知波奈平比彼 彼 余
知氏字良無登須礼村十九 十九 小引攀而折毛不折毛

又^四青柳乃保都枝與治等理ふ見^八字治拾遺五
九^ト左右の^手乎あて尻を抱へて如何ふ爲むト云
と與邊理須邊理ト云と有^ト同言と所見
た^ト若^ト此與邊^ト寄と義相近き少や^ト刀葉五ト云余知
古良等^ト乎多^ト豆佐波利提河蘓比家^ト年等伎能佐迦利字
十四^ト奈礼毛安礼毛余知^ト字曾母氏流る^ト有^トを
鈴屋翁説^ト同^ト程を云と云れ^トれ^トも^ト扣名抄魚鳥
類^ト鮫唐韻云^ト鮫音怯今案和名乎佐
俗^ト云ふ魚串の事^トあ^トる^ト乎^ト佐^ト之^トハ^ト魚刺あり與知字
佐^ト之^トハ^ト寄魚刺して同^ト程の魚を刺たりト云聞えき

今上^ト鐵山に中^トに
段^トに^ト思^トふ^ト者^ト
昔^トに^ト思^トふ^ト者^ト
結^トば^ト思^トふ^ト者^ト
爲^トす^ト思^トふ^ト者^ト
四^ト同^ト機^ト三^ト門^ト
下^ト定^ト底^ト人^ト衆^ト能^ト
機^ト上^ト持^ト定^ト事^ト
親^ト屬^ト日^ト一^ト喜^ト喜^ト
比^ト又^ト

る^トも^ト思^トふ^ト可^トく^ト一^ト偕^ト與^ト邊^トハ^ト俗^トト^ト取^ト著^ト云^トト^ト當^トハ^ト
右^トの^ト口^ト葉^トあり^トも^ト攀^ト而^ト乎^ト折^ト都^トハ^ト寄^ト而^ト乎^ト折^ト都^トあり^ト引^ト攀
而^トハ^ト引^ト寄^ト而^トあり^ト與^ト治^ト等^ト理^トハ^ト寄^ト取^トと^ト見^トえ^ト大^トハ^ト解^ト得^トる
を^ト余^ト知^ト古^ト等^トと^ト云^トを^トも^ト寄^ト子^ト等^トと^ト譯^トして^ト見^トる^トト^ト若^トき^ト問
ハ^ト男^ト女^ト共^ト小^ト互^トハ^ト恋^ト慕^トの^ト情^ト有^トる^ト者^トあり^ト此^トを
以^トて^ト予^トハ^ト伺^ト言^トと^ト定^トめて^ト説^トを^ト爲^トす^ト者^トあり^ト右^トの^ト十^ト四^ト卷
小^ト知^ト余^ト小^ト作^トれ^トる^トを^ト今^ト拾^ト穂^ト本^ト小^ト依^トり^トり^ト十^ト六^ト卷^ト竹^ト取^ト翁
歌^ト小^ト子^ト等^ト何^ト四^ト千^ト庭^トと^ト有^トも^ト子^ト等^トハ^ト寄^トハ^トと^ト聞^トべ^ト一^ト即
攀^トハ^ト俗^ト小^ト取^ト著^トく^ト攀^ト云^トト^ト當^トる^ト言^トあり^トが^ト故^ト小^ト大^トハ^ト寄^トの
義^トハ^ト有^トり^ト又^ト攀^ト援^トく^ト攀^ト折^トると^トハ^ト常^トあり^ト云^ト事^トあり^ト文
選^トハ^ト小^ト躋^トを^ト攀^ト登^ト
ト^ト云^ト小^ト訓^ト也^トたり^ト○^ト且^ト喜^トハ^ト靈^ト異^ト記^ト下^ト二十^ト溺^ト死^トせ^トると
思^トひ^ト人^トの^ト還^ト來^ト以^トる^ト所^ト小^ト妻^ト子^ト見^ト之^ト面^ト目^ト灑^ト青^ト驚^ト怪^ト之^ト

日水書紀傳三十一
〇三百九十三

言入海溺死逕^ニ七日而爲齋食報恩既畢不思之外何
活還來若是夢矣若是魂無馬養向妻子具陳先事於是
妻子相悲相喜と云事の有不其怪しめる状能似たり
己ふも引る古事記に我子者不死有祁理我君者不死
坐祁理と有る程の事ありければ其味相高彦根神と
知ざりし間^ニ疑^疑つるも且ハ喜ばれけし事思ふ可し
右^{三百八}小引る万葉^ニ八^十柿本人麻呂^主の妻の死
しれし時ハ喧鳥之音母不所聞玉梓道行人毛獨谷似
之不去者爲使^便字無見妹之名喚而袖曾振鶴^三四^十挽
歌の左書に紀皇女薨後山前代^主石田王作之也と有る

河風寒長谷辛歎乍公之阿流久尔似入母途哉あると有
も其亡人小似たり人をたふ得て心を慰めむと爲る
ふて作物語あぐ源氏桐壺^{二十}小年月小添て御息
所の御事を思ふ忘る、時無し慰しやと然る可き入
こを参るせ給へと准るひ小思さるくたふ甚難き世
あも疎しとの^二万小思成ぬる小云^二后宮の姫
君こり甚能う以思えて生出させ給へりけれ難有き
容貌^か人あるむと奏しゆる小誠あやと御心止めて懇
切小聞えさせ給ひけり云と實小御形有状怪しき迄
が思え給へる云と思し給るとハ無水と自然御心^移

あひて此上無く思し慰むむやうも哀あはれ業わざあり
けり手習ナ十九小女の尼君ハ上達部の北方たて有け
るが其人やるめ給ひて後女唯一人を甚こく傳傳づき
て善き君達を婿むすりて思し扱あけしけり其女の君の
亡るゆふければ心憂うれし甚こく思入て形かたちとも易やすへ斯
る山里やまの住始すまたるゆけり世よ共とも小恋渡こる入の
形かたちも思し比ひへつ可ようむ入いをたふ見みるゝると
徒然ただと心細こき任まり思し歎なげきけりを斯こく思しえぬ人の
形かたち氣きいひも勝かつめ状じやうあるを得えたれば現まの事こととも思しえ
ず恠あはれ心こゝろちちあるがう嬉うれしと思しふと有あるは妻子

あど小理オナ無く離わかる時とき其准しんひある人を尋求せんぐめ
ても慰なぐさむる人ひと情じやうを以て書かく者ものあり況いはて今いま七ななびぬる
人の前まへ小其見み混まり可よき神かみの立たりけり衣い帯おび攀かき
牽ひり手て足あしあも取と懸かりても喜よろこびつ可よき事ことの状じやうあり
第一だいいち一書ひと小攀かき持もち衣い帯おびの下した小不可よ離わかる言ことばの有
あても實まことは其その不ふと剛こゝろくし任まり放はなたさる事こと知
へきあり此こゝよ就つての上うへ二百にひゃく九こゝろ十九じゅう丁ぢやう三百さん五ご十九じゅう丁ぢやう
小注しよるが如ごとく凡たゞ以もつ衆しゆ鳥とり任まり事ことと有あり思しひを潜ひそめ考かふ
可よき所ところあり○且かつハ加都波かどなみと訓ことばの彼かと此こゝと二交ふる時とき
小置おり辞ことばあり古事記白檮原官段大御歌の加都賀都
母伊夜佐岐陀豆流延哀あは斯あ麻あ加か年ねんと詠よせ給たまへるハ大
父米命やの那なと由よし久く哀あは登あ賣う持もち母はは多た礼れ哀あは志し摩ま加か年ねんと詠よ

て奉す此の對へさせ御在坐して其七女の申より
一女を抽出させ給ひて且もその詔給へるあり其
事を注して記傳二十二十五五且も未慥あり初端
にあると云辭あり假令い且見ゆと未詳とあり
見えす初見え初を云ふ其慥不見ゆと未
見えざらとの中間あり故且見え且未見えと云
意少て且と重云ある可一萬葉四四十五十五玉主尔珠
者授而勝且も枕與吾者率二將宿此い且も玉主
玉を授けてと云ふて未受張て授畢ゆふ非
れども先端と授初たるありと云れき其十四十四十六十六

押
會顯宗天皇元年御
市也押能名皇子御
四月の御事也知良
けの時と臨光景
言深更御と有る麻
柿布と訓り

小阿之賀利乃和乎可難夜麻能可頭乃本能和乎可豆
佐祿毛可豆佐可受等毛と有る且直寢且不放小て如
此並云ハ靈異記下十七一恠一悲あると似たる可
然此ハ此の且喜且慥も一喜一慥又ハ或喜或慥と
書ても同ト意ハ物取留すて車の二途ハ支ハ
たる小云辭あるありけり字書小且字を注して未定
訓義を考ふるハ加都と片カタクカト同トキ状ハ聞ゆあり源
氏若菜下小然一重キ罪ハ當る可きありぬ身
の徒小成める心ハ爲ハ然ハハ當る可きありぬ身
悪く思ハ古今六帖ハ惡の如理無キ物ハ毎りけり且
見る人の且ハ悲一拾遺ハ世中ハ經るハ速無キ白
雪の且ハ消ぬる物と知るハ其外ハも擧るハ速無キ白
ず○且慥私記小加津波刀止布と訓り孝徳天皇大化

合見之為明天皇
四年御紀皇孫建
王八聖給
不忍哀傷高極
等七

五年御紀小阿倍大臣薨天皇幸朱雀門舉哀而慟之有
之慟學麻栲比多麻^布有之其ハ持統天皇元年御紀小
慟哭之美祿多氏麻都流之訓之其ハ哭泣^一車^多
此小惑字の如く訓たるハ一度ハ喜^比衣帶^小攀
牽^り一度ハ恠^一其^足取懸^りて見混^ひつる由^多
る可^一次^多味和^高彦根神の御言小何為誤我於此
者も宣^る是^多め神功皇后元年御紀小新羅王以為
非常之兵將滅己國讐而失志^乃今醒之日^多武烈天
皇前御紀小戮鮪臣於乃樂山是時影媛逐行戮處見是
戮已驚惶失^所悲淚盈^目又^有る^多失志又失^所を心惑

と訓^其又同義^少仁賢天皇六年御紀小飽田女排
個顧^恋失緒傷心哭聲^尤切令人腸断^之有^る失緒傷心
之訓^り即^乃葉^三^{三十}高市皇子尊城上殯宮時歌^ハ鶉
成伊波比廻雖侍候佐母良比不得者春鳥之佐麻欲比
奴礼者^之詠^其短歌小埴安乃池之堤之隱沼乃去方
字不知舍人者迷^惑と有^て吟^ふと惑^ふとを並^べて悔
之歎^く事^を云^り六^{三十}小弱女乃惑^ル依^而九^{十七}小
人乃皆如是^迷迷有者又^{三十}闇夜成思迷^匍匐^{十三}
よ春山^霧惑^在十一^{二十}小夢谷何鴨不所見雖所見吾
鴨迷^恋茂^尔十二^{十九}小夢可毛吾香惑流恋之繁^尔十三

三十一 小之而居而去方毛不知朝霧乃思惑而杖不足八
取乃嘆之友記乎無見跡るを麻持布（心迷ひ爲り）ハ物（前後）の消息を
取失ひて我亦非ぬ如（心迷ひ爲り）ハ麻持布ハ麻
見る可（心迷ひ爲り）くさるあり決めて物を哀しと歎く事の甚
しき時ハ心惑を爲る者なれば即悲哀の義も成れ
る者あり通證ハ慟與迷通目醉也喜其類哀其死交
至故訓爲慈字書慟哀過動心也と注されたるハ謂ハ
たる説ふ又源氏（細流）注ハ引るハ此田慟を伊多年
めけり
と訓り靈異記下二十 讃岐國美貴郡大領の妻の死て
六段
牛と化れる事と云所ハ東西之人念之走集恠觀隙頃
莫息大領及男女之愧耻（カウヨロシム）慟と有る下ハ威を惠也と
注ハ慟ハ痛と注せれば此ハ且喜と云ふハ且慟と訓
カウヨロシム

ひ方其意相（ウラハ）反ハ一して大ハ叶へる状ありハ伊多年と
も訓べきあり然るハ上二百九十六丁 由注ハ如く
三百五十九丁
此鳥高津鳥の歿ハ依て身罷ハ一ハ其事ハ類ハ
りて形を易たりけしハ此喪屋ハ殯を爲つハ非
ぬ物の如くありハ其天種（種）ハ神ハ相似たる神の此ハ
吊るハ御在ハ坐たしハ且ハ喜（心迷ひ爲り）ふ可き事ハ在
ハ且ハ其迷心の醒てハ愈悲ハ成ぬ可き事ハ在
ありハ万葉二二十 小皇子尊官舎人等慟哀作歌又三
八丁
七柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌も有る端
書るハ又其二十 皇有馬王子自傷結松枝歌又二十
六丁

移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大妻皇女哀傷御
作歌あど作て何れも同ト挽歌あど小慟と傷とを痛
心書たるを以ても伊多年ある事を知べし三五十
挽歌小世間之常如是耳跡可都知跡痛情者不忍都毛
八五十ト小叩く物字念者將言爲便將爲爲便毛奈之る
ども見ゆ猶委しくハ己小傳廿三七十哀傷の所小注
せるを見る可きあり同ト車と二所小注さあも煩
宝劍出現章あるとハ以ク趣を同トく物り此と其
爲べりさる所ありを以如此云あり○念然作色曰
小私記小以加利於毛保天利与と有り即四神出生章
第十二一書小見えて其傳十四百一ト小注一たりき○

明友の登毛賀伎と訓り私記ハ其毛賀食と見え偕
古事記小ハ此を愛友と見え元来登毛ハ云ふ本あり
けり神功皇后元年御紀小小竹祝與天野祝共爲善友
雄略天皇二年御紀小明友を登毛と訓り継体天皇二
十一年御紀小昔爲吾伴トモ摩肩觸肘共器同食ると有ハ
更あり三方葉七三十ト小磐疊三山常知管毛五者恋香同
等不有國十一十二ト小高山岑行完友衆又二十ト大夫波
友之駿馬尔十六九ト小死藻生藻同心跡結而爲友八違我
藻將依又ト何爲迹違將居否藻諾藻友之波と我裳將
依あど有り和名抄小明友朋友論語注云同門曰明同志白

今浴堂大まも世帯カ
友等大まも物去む
て赤りーと云

友和名度と有る其ハ仁賢天皇六年御紀小同伴者を
登毛太知とも登毛賀良とも訓カ是るり伊勢物語十
段小昔男東へ行けり小友等共小云遺遺せける空穗吹
上小主の君如此勢有る任ひハ為給へど善き友等小
逢給上事此度ふれば菊宴下小行末ふも草木鳥獸
ハ成とも友等こころ成めと云契り事公源氏東屋
三十一大ま大夫ふとの若くても頃友等おて在ける人ハ
四丁毛詩小共人と然訓せたり若て又
云るるど有る其登毛賀良と云ハ右の同伴者伴の外小
も御紀小属類黨類徒黨又ハ旗字をも訓り佛足石歌
小佐伎波比乃河都伎止毛加羅源氏明石五小深き御

今皇極元年御
紀ハ落難之見
訓

愛々ト大八島小遍く沈める輩をこころ多く浮べ給
ひしり見元文選小種々群分と有る群属も痛痛も
倫とも登毛賀良と訓り字鏡小儕等類也足倫也止毛
又太と見えたり若て此小明友を登毛賀良と訓る賀
久比と見えたり若て此小明友を登毛賀良と訓る賀
伎ハ安閑天皇元年御紀の部曲ウキヤツを氏奴と訓るを孝徳
天皇大化二年御紀小部曲部曲を加伎也訓せたるハ其
も藩籬カキの義義も其一類を凡て去称云ある其通説も或説
小友籬の義ある由小云るハ實不然る言あり諸友と
云ハ記傳十五十ハ小凡て伴とハ官職小在れ何小在
此一部伴ナニトモクふ云る其伴ナニトモク伴ナニトモク云ふ是るり又何と

毎くて交りし親しむ人を友と云ふも同意ありと云れ
 一如く親属も非ずして他ある人が親しむ睦ぶを云
 称あるが登毛（此）知ハ友等あり登毛賀良ハ友族あり
 登毛賀伎ハ友部ありと知べし（トモヲキ）此外凡て伴ふると云
 事あり物と物も一あるを共と云ふも別あり非ず又
 從者を登毛毘登と訓も其友と爲るも非ずして伴ふ
 へる人の義あり又明友字ハ公手傳ハ同門曰友同
 義あり志曰友と云ふ周礼注小同師曰友と云ひ又書
 言大全小同道同爲明志同爲明友明以義合友以敬久不
 とも云ふ然れども字は拘りざして唯此小てハ唯
 視し（伴ふ者）○理宜相吊ハ第一一書小明友喪亡故吾来
 吊り書され古事記にも於是河邊志貴高日子根神大
 怒曰我者愛友故弔来耳と見え其始愛ハ一き御明

友して御在し坐す時の御睦を忘れさせ御在し坐す
 ても其喪を語りしせ御在し坐す由を其見過る喪會
 者小向りし一厲として宣はする所あり宣相平と云ハ
 死生の問小係り易させ給ひざる由あり此小引出し
 も恐くハ有れども神功皇后元年御紀小竹祝與天
 野祝共爲善友小竹祝逢病而死之天野祝血泣曰吾也
 生爲交友何死之無同死乎則狀屍側而自死と有ハ如
 く明友の交ハ如此あり深く御在し坐すべき理ある者
 ありける（口訣）小明友之道神猶深切と注せれども猶
 字如何明友の道（神の深切）小爲させ置
 せればこそ人あり義を以て明友小交ハる
 と出事の有ありけし故本末の違有てこそ○汚穢ハ

私記小介加良波之支古止乎と有ハ死穢を宣へるる
り柳死体を以て穢と爲る事の本ハも其始伊弉諾
伊弉册二柱神天上より天降るを御在ハ坐リ此大八
洲國及大地万国を生成シ給ヒ又諸神等を生成させ
御在ハ坐ケル間ハ火神を生奉るを給へる由ハ依テ
伊弉册尊ハ御身ハ黄泉國ハ御在ハ坐リ
彼國を所知食す御事と成り此ハ伊弉册諾尊追慕
以御在ハ坐テけるハ實ハ汚穢キ醜國ハ在ケルハ
見畏メ御在ハ坐テ逃返ルを給ヒけり此ハ就テ筑
紫日向ハ御在ハ坐テ襖被ル云事を物爲シ給へり

伊り偕然顔御身ハ御在ハ坐リ御在ハ坐リ御在ハ坐リ
其御在ハ坐ズありぬる事ハ入世ト成テ身罷ル云
云事の有ル異アリす此を以テ此幸行の御事を死と
云事の始ハ取ルあり譬ヘハ四神出生章第六一書
ハ其神の御在ハ坐ズ成ル所ハ伊弉册尊ノ哭泣流
涕焉其淚墮而爲神是即畝丘樹下所居之神号泣澤女
命矣モ有ハ其別れを哀シ給フのハありと万葉
二三十一高市皇子尊城上殯官之時歌ノ下ハ或書短歌一首
哭澤之神社尔三輪須惠雖禱祈我王者高所知奴右一
首類聚歌林曰檜隈女王怨泣澤神社之歌也モ有カ如

く人の死しむと爲を返し留め給ふ神と成坐内又古
事記訶志北宮段天皇の崩御し給へる所より驚懼
而坐殯宮更取國之大奴佐而略爲國之大後と有る伊
弉册尊の彼國へ御在り坐けるを追往し還らせ御在
り坐て伊弉諾尊の御身祿の御事御在り坐けり倣
ひて神代より例と成れる者あり故喪事不就て此
二柱神の故事倣ふ事の多きも右の如き所以倣
れる者あり但伊弉册尊の其時の御事倣化去と書
尋む云ひ膿涕虫流と云ひ又殯歛或は生乎るど
書れたる者の古傳倣非中世倣儒佛の徒の加筆倣

て人世の後の状を以て神代の古を証たる者あり
紀記小傳り所と雖も其去取必し無て得有
べりざるあり其の第六一書倣或所謂泉津平坂者
謂歎と有る儒流の加筆ある事已先達の論有る如
然る小項問良海本と云る古本を見る小其黄泉津
平坂言死出山或所謂泉津平坂者之不復回別處有祖
師云臨死氣絶之際是謂歎云と有る文の拙き本
其祖師と云者の手小成るか故小右の如く文を直
て作るい文人の所爲あるを以り此を以て古傳を
本と爲てい有る儒佛諸傳十二百二十五五十五
の加筆有る事を辨ふ可し
注るが如く凡宇宙お立る人身ハ伊弉諾大神ハ
天上より牽せ御在り坐り伊弉册大神ハ地下よ
り引せ御在り坐て謂ゆる神の持てる命ある者あり

然して其靈性いづも天上より昇りて天神より復命して
留宅を由るるが其身体いづも土中より埋りて葬る事な
るが是其伊弉册大神より渡り奉る事ある者あり彼等
六ノ一書より其於泉津平坂所塞磐石是謂泉門塞大神亦
名道返大神矣と有り若て十種神寶より死及玉道返玉
と云が有り其死往を返して活る寶の祢ある事合せて
出雲風土記出雲郡宇賀郷の窟の下より夢至此磯窟之
邊者必死故俗人自古至今号云黄泉之坂黄泉之穴也
と有て死は全く黄泉國より屬る事ある事を知べきあり
若て敏達天皇十二年御紀より蘓生又靈異記より還蘓と

有るとを黄泉返と訓む事なり其死て往く魂魄の
此より返来るより非ず死（死）たる屍の活出たるを云ふ
り借人の死る時ハ漸次より其屍の腐亡る者あるが故
小此を穢と一又汚穢と云ふ故古事記より何吾比
穢死人云而と有て其汚穢を惡（死体と穢死者と爲て其）とせ給ひて此より御怒
坐り車より有る然して愛いしき友ありとて吊来り
ぬと宣給ひしとハ大小別ある御行あるハ天推彦が
生平の一時ハ素よめ善いしき友ありて御在り坐り死
たり魂より就るも其御心ハ易しと給はざるも此御
吊しハ御在り坐りしと其屍より至りてハ汚穢と

爲て忌避させ給へる御心を思ふ可き事あり。此
即其屍ハ黄泉國ヨ屬ク物アル謂アルを以ル事云
も更アリ源氏宇習卷小斯テ置タ死果侍メ可
形アリ其命絶メを見ル捨シ事ハ甚シ事アリ
云ク猶試小暫時湯ヲ吞セとシ助誡小終シ死心
くハ云限小非ズと宣ヒ此大徳シ抱キ入サ給ヘ
ふヲ弟子共戴ハ業ヲ甚ク煩ク給フ入ノ御
邊ハ善リ物ヲ取入給テ穢ク心出來ルとシ
と戻クも有リ甚ク弱ク消以て行ヤるハ得
活侍不意小穢クひ小隱ル煩ク可キ事然す
が小甚シ止事無キ人ア侍メれク穢クひタ人
とて立ルかク追返しフと有ルとシ死ヲ穢ルと
ろク共アリ此等ノ法師ノ爲ル事ヲ在ルとシ死ル
事ヲ忌シ上世ノ○不憚ハ私記ハ波ハ可良須之豆
意ヲ矢ダる者あり○訓ノ右ハ注ル如ク死人ノ屍ハも黄泉國ハ

屬テ甚ク汚穢有者少在レ其親屬ノ外
深ク忌憚ル事ハ其殯所ハ深ク慎ル者多
を善ク時友ハ御在シ坐ケ其御交ヲ忘ルけ
せ給ハず○弔ルいセ給ヘる由アリ仁徳天皇四十
年御紀ハ然レ重ハ皇后ノ言ハ敦キ支之義義而履仲天皇前
御紀ハ今既被命豈難ク於殺神皇子子と重ハ又ハ難ク字
を波婆加流ト訓ナり天智天皇十年御紀歌ハ河箇悟
馬能以喻企波ノ箇婆林矩儒播羅奈尔能都底舉騰多
拖尼之曳雞武ノ葉三
天雲毛伊去波伐加利又天雲毛伊去羽計田菜引物緒

一重六況て甚憚多
まじ

又三十一 白雲者行憚而棚引所見十二 二下 小赤駒之射
去羽許源氏桐壺初一人の諍めをも得憚りて給ふ
ず又下莫計の人の諍めをも得憚りて給ふず云々
あど甚多語あれ注す小及ハず此ハ雄略天皇元
年御紀小古人有云娜毗騰那耶磨珥此古語未詳有ハ汝
人弥幡尔云事あて皇女の官庭を徐々歩ませ御
在坐て何憚りて給へる御有状を然申せりあて
俗小傍人無か如く打振るるを幡を爲る云是あり
散木集詞書小佛の御舌ハ廣く長く一ツ大空あり
憚りたり云事を詠方又河強陀佛の御身ハ世中小満

て測り得べりすと云事を詠る弥陀の身も天津御
空小憚りて世も狭くとや思知りむ又假字孝經
と云物ハ孔子の徳を祿へて天地の間小満憚りて御
在坐すると云類の憚りハ天地の間小満充塞と云
て右の弥幡小同く又神名小天之波、支神と申す
ハ家之塞君神の義傳十九五百四小注るか如し然れ
ハ憚ハ幡ハカ在坐て其幡有る状を云事ありと知べき者
あり又以兵と云史記孔子世家小請先嘗沮之沮之亦
不可史記正義小毀也と注せり又カ劔の具小鉏と云
物有も由同言由の 偕死穢を深く忌憚りて給ふ事ハ

神代より然る事少く其事小觸り時ハ必悪解除を爲
して先其^穢身を^穢めて次小善解除を爲て其身を淨しん
神代以来の例あり事己小傳廿一 百 十 廿二 二百
小注ろカ如ク故神祇令小仇散齋之内諸司理事如舊
不得吊喪間病食實亦不判刑殺不決罰罪人不作音樂
不預穢惡之事云ト有て其吊喪間病の義解小謂有
重親喪病者不在預祭之限也ト有カ如ク親屬ハ其制
の限小非ろカ以外ハ此を忌憚る事神事小預ろを以
あり次小不預穢惡之事の義解小謂穢惡者不淨之物
鬼神所惡也と見えたるハ汚穢キ物小所善キ觸り時

ハ其氣の移りて共小汚穢く成カ故小神祇の深く此
を惡ませ給ふるあり故延曆廿年五月十四日格小科被
事太政官符定准犯科被事一大被科物廿八種^中右闕
忌大嘗祭事及同祭齋月内吊喪間病判署刑殺文書次
四討食實預穢惡之事者且科大被所輸雜物其如前件官
人有犯氣觸見任一上被科物廿六種^中右闕忌新嘗祭
鎮魂祭神嘗祭祈年祭月次祭神衣祭等事毘伊勢太神
宮祓宜凶人及穢御膳物並新嘗祭諸齋祭日犯吊喪間
上秩等六色禁忌者宜科上被輸^輸物如右一中被科物廿二
種^中右闕忌大忌祭風神祭鎮花祭三枝祭鎮火祭相嘗

祭道饗祭平野祭園韓神春日等祭事^政物忌戸座御火
炬^政野物忌女及觸穢忌事預御膳所^政忌火等祭齋日^政
祝^政祢宜及預祭事神戸人犯^政吊喪問病等六色禁忌者宜
科中^政後輸物如右^政一下^政後科物^政二種^政略^政右闕^政忌諸祭祀
車及齋日^政祝^政祢宜^政預祭神戸人犯^政諸禁忌者宜^政科^政下
後輸物如右^政略^政と有^政て^政後^政を^政科^政する^政法^政を^政定^政め^政せ^政給^政へ
る^政穢忌の事^政預^政ると^政喪^政病^政と^政吊^政問^政ふ^政事^政を^政深^政く^政忌^政せ
給^政へ^政る^政を^政以^政て^政神^政の^政御^政心^政を^政も^政推^政量^政り^政奉^政る^政可^政き^政御^政事^政を
る^政ず^政り^政又^政職^政制^政律^政も^政凡^政大^政祀^政在^政散^政齋^政而^政吊^政喪^政問^政病^政疾
七^政致^政齋^政者^政各^政加^政二^政等^政と^政云^政事^政有^政り^政右^政の^政如^政く^政後^政を^政科^政せ^政る^政
る^政ハ^政神^政車^政あり^政管^政杖^政の^政刑^政有^政ハ^政公^政事^政也^政神^政事^政と^政云

事とを以て天下を政ごせ故臨時祭式凡觸穢忌
給ふ神國の古風仰奉る可也
事應忌者人死限卅日^{自葬日}産七日六畜死五月産三
日^{鶏非}其喫完三日^{此官備尋常忌之但}と有^ハ石の神
祢令^ハ謂^ハゆる穢忌之事に見えたる是より次ハ凡吊
喪問病及到山作處遭三七日法事者雖身不穢而當日
不可^ハ参^ハ入^ハ内^ハ裏^ハと有^ハハ喪^ハを^ハ申^ハし^ハて^ハ穢^ハれ^ハざる^ハ云^ハ事
ハ有^ハり^ハず^ハ事^ハあり^ハども^ハ立^ハる^ハが^ハ穢^ハれ^ハざる^ハ事^ハあり^ハて
平戸記ハ其後参六條官御悲歎過法云々令^ハ混^ハ彼^ハ穢^ハ之
間^ハホ著^ハ者^ハ懸^ハ尻^ハ於^ハ簀^ハ子^ハ端^ハ於^ハ北^ハ面^ハ妻^ハ戸^ハ口^ハ謁^ハ女^ハ房^ハと有^ハる
類^ハ是^ハより^ハ次^ハハ凡^ハ改^ハ葬^ハ及^ハ四^ハ月^ハ以上^ハ傷^ハ胎^ハ並^ハ忌^ハ三十^ハ日^ハ其

三月以下傷胎忌七日と有るを改葬をば死穢シ准ル給ふ式あり次小凡祈年賀茂月次神嘗新嘗等祭前後散齋之日奪情僧尼及從公之輩不得參入内裏裏と有る奪情從公と云ハ官小在て樞要の人ハ其忌服の日限を約め奉るを云ふ公事小免して使ひ給へども神事小ハ穢有る身あるが故小内裏小ハ參入を令憚給へる由あり次小凡甲處有穢シ入其處謂著座下亦同乙及同處人皆爲穢丙入乙處只丙一身爲穢同處人不爲穢乙入丙處同處人皆爲穢丁入丙處不爲穢と云事有り宇槐雜抄乙死人の候處ハ甲あり死人を取奪後其處小

入る人ハ乙あり其人の來る所ハ丙あり其人去の後其處小來る人ハ丁あり甲人來る所ハ乙あり甲ハ同時居合すハ乙あり甲乙去て後小其處ハ向ふ人ハ丙あり丙人來る所ハ丁あり丙人ト同居して居合す人ハ丁あり丙人去て後來る人ハ不及丁穢と有て其穢ハ相往來ナ間小在て往も來も共小穢と事右して知べし今一近々云ふハ甲の家小死人有り其小吊るひ行く者ハ乙あり此小依て乙の家の穢甲小異なる事毎々家内中小亘る多し若て其乙の家小來る人ハ丙あり家小返りて唯一身の穢の乙して家内

小預り其丙の家小来り人ハ下あり此ハ穢トハ爲
ざる由ありて甲乙丙の三家小及びて其輕重有る趣
り然して右小謂著座ト有て行て家小入るとも著座
だよ爲されハ穢トハ爲ざる事右の平戸記の文を以
ても知れたり源氏夕顔三十四ハ大殿の君等參給へ
ど頭中將をりのを立るがく此方小入給へハ宣ひ
て御簾の内あがく宣ふ乳婦小侍り者此五月の頃
あひすめ煩ひ侍りしが云々又起りて弱くあむ成
ふたる今見ハ一度吊り申たれり初め
より割さいハ者割の今ハの刻割ハ思ひも

思給へて罷りし其家ありけり下人の病けりか
俄小得出敢て七るりよけりを怖憚りて日を暮して
あむ取出侍りけりを聞著侍りハ神事ある頃ハ
甚不便ある事と思給へ畏りて得參りぬるり云々
ミ有ハ夕顔の家ハ甲穢源氏君其家小入給へハハ
て穢あり此小頭中將の著座給へるむハ丙穢ト成る
故小立るがく入せ給へど宣へるあり此より其次第
を曉る可し此事を引て或説小香を著るがく板敷小
上りよめ今も公家小ハ觸穢の時穢小混ず可り
ざるの入止事を得ずハ穢の所小入ハ薦を敷て

其上を草履を著て渡る然てい穢小成すと不聞又
門の闕闕も薦を掛て其上を通ふ閫を踏め即穢る
り云ふ又簪子小腰掛たるも穢小非ず伊勢祠官も
此趣あり云り又同巻小日暮て惟光参れり斯る穢
グ罷罷つやと宣ふ任小袖小御良を推當て泣給ふ寄生
見見大將殿も説説い小添て嬉し思す夜べ御在坐た
りり畏畏おり小即此御悦も打添て立るが参給へり
云云此ハ産穢の方あるあり蜻蛉小獨の子を徒小成
して思ふ親親の心小猶此由縁縁ここ面立面立りけ
れ思思知るをり用意用意い見す可き事と思す彼處
小ハ常陸守立るが来て云々云々習小故ハ官の御女
殊小惱給ふ事事毎て卒小隱給へりとして其御葬送の
難事共仕奉り仕奉り伴るとして昨日ハ得参りざり云々
云々穢穢ひたる人として立るが立るが進進返返しし云々有
あども當時の風俗を書せる者あるハ証証取べき有

○遠自赴来京ハ私記小止保久與利支可奈志年と訓
り此ハ瑞珠盟約章素戔鳴尊の天小外坐外坐し時の事小
是以跋波雲霧遠自参参と有る語勢小似たり此ハ天上
小殯所殯所ハ竹竹り吊りしせ給ふ此ハ書きたり故小其
文法を用り用り者あり又右の来京赴と金澤本ハ由
伎河波礼布と訓れども其所めての語ある時ハ私記
の方勝り方勝りと思しき由ハ第一書小朋友喪亡故吾
即来吊と書され古事記小我者愛友故吊来と有て
何れも来字を用ひしれたら小意を得て考ふ可き事
ありあり赴字今本小起小誤れり誤れりを纂流本ハ今従い
て改めて其上良海本ハ自遠赴旅自遠赴旅と作れり

る赴ハ然る言ハケル旅ハ誤ある可き考べ一〇七
又金澤本ハ赴と作りル雅小赴至也と注せり
者ハ牟那志伎比登を訓り私記ハ死人と注けて末
加流毛乃と訓たり第一一書あるハ死者と書て末加
流比登と訓たり此ハ其二訓ハ依べきりとも思ふ
事あれども殊更ハ亡者の字を書きたるを如何ハ然
訓ハ右の訓を除てハ一ハ那伎比登とハ訓へきあり
牟那志ハ此下ある空國ハクニを古事記ハ韓國カランニと作りて
空虚の義あり故身無又ハ貴無ミナシの義とハ見る可き
ハ一葉三五トハ世間者空物跡將有登曾此照月者満
闕焉家流と有ハ然悲傷膳部王歌と有て世の速無き事

詠りゆめ又ハ毛奈吉空家者草枕旅ハ益而辛苦有
家里と有るハ共ハ挽歌ハて人の死ハを牟那志と
云ハ是あり源氏御法十四ハ小志ハ終ハ聞セ給ハ成
ぬるハこころハ有ハめハ空ハ御骸ハ今一度見奉
らむの志叶ハ可き時ハ唯今より外ハ何てリ有ハ
云ハあど多く云り又那伎比登とも訓べ一と云ハ天
神本紀ある此の死人を然訓ハ又世ハ七人亡者ある
を訓ればあり万葉十二ハ山跡庭啼而香將來霞云
鳥汝鳴毎無人所思古今哀場ハ無き人の宿ハ通ハ
郭公係て音ハのハ鳴ハ告るハ新古今ハ亡き人の形

見の雲や時雨しむ夕の雨小色に見えぬと新千載小
無き人の上の空ある形見の煙と成りて夕暮の雲
あど多く詠る是あり又古今哀傷小色をた小聞で別
る魂よりの無き床小寝心君が哀しきと有る此を
空しき床と訓るふと相通りて云て其義の異らざる
をも思ふ可き者あり又此亡者を年那志能比登と訓
小宗因曰亡者ト部兼照^照照木云武加志乃比登と有
此ども死人を其所小置る^置昔の人の人云云云云
ざるあり又谷川翁説小土佐日記^{日記}亡女武加志陪比
登と云此たり同記二月三日條小貝石を多り斯
れ昔の人をのこ悲つ^悲船ある入の詠る云其十
日條小人昔船の泊る所小子を抱^抱つ下上りす此
を見て昔の子の母哀しき小堪ず^堪云と有る其
國あて亡り^亡子の事ふして現在の事と思ふ非る

可○誤ハ河夜麻氏流登と訓ハ一算一書小も如
何誤死人於我耶と見え古事記ハ此義を釋^釋て其過
所以者此二柱神之容姿甚能相似故是以過也又書
此其御怒の御言小何^吾比穢死人云而と有る此小誤つ
と云車の由あり万葉十五^{二十}三^丁小伊敷妣等能伊波比
麻多祢可多太末可母安夜^麻知之家年と並べて伊
波布の忌慎^忌しむ方安夜未知^忌息緩める方小云分て
るを以て此言の味を知べきあり字鏡小謬誤也詐也
僻也^差云阿也万豆又と見え^た又註誤也過也失也
奈也^年又不久也又と見え^た又註誤也過也失也
誑不正也誤也あど有り又大殿祭^{御門祭}詞別小谷過^在在
阿也万豆

後詞小過犯家種字雜字罪字と有ふと有り和訓字彙字小犯
 過の罪字知て爲の悪を犯と云ひ不覺して爲の罪字
 過と云ふ律の法ありと云れたるか如く然る無心の
 罪を過失と云由律小見えたり此の味字相字高字彦字根字神字と
 知て本より爲取り見混へるる爲り事ありを實小天推彦神あり
 ちと思ふ取り見混へるる爲り事あり故小誤と云るありけ
 り俗小云ふ間違ひと云ふ當り可一過を史音例小越
 り度也と云ふも今世小多く云事あり字書小過失誤
 也無心之失謂之過有心之過注諸此小誤我於亡者と有
 謂之惡も見えたる克合へり注當りて古事記小比穢死人と比字を書いたる記
 傳十三法十取比を那蘓布流注訓べき百葉八十九小

吾屋外爾蒔之瞿麥何時毛花尔咲奈武名蘓經乍見武
 十一十小久方天光月隱去何名副妹徳十八十小保等
 登藝須許欲奈枳和多礼登毛之備辛都久欲尔奈蘓信
 曾能可氣母見年二十十三小秋等伊弊婆許と呂曾伊
 多伎宇多豆家尔花尔奈蘓信豆見麻久保里香聞又十四
 六宇流波之美安我毛布伎美波奈豆之故我波奈尔奈
 曾信豆美礼杼安可奴香母あど有小依つ古今集序
 小云る那須良閑歌と漢國の比小當りりと云れりハ
 然る言ふて那蘓布とハ其真物ありハ物を其物の知
 く取成す事小一在ければ誤の義自小含り猶伊轉

物語九十 小隨イナリ分思イ爲ハ心ハ奈蘇イ開イるハ高キ尊ノ十ト持

苦シ一トりハけレのハ有ルをレ准ルハ無クと抄物ハ在リ源氏

桐壺ニ十ト小甚ト下キ武士ハ仇敵ハありトも見てハ打咲ル

ぬ可キ状ハの爲ハ給ハれハ得ル差放チ給ハず女御子等ニ

所御在リ坐セと准ルひ給ハ可キたハ不無クけレるハ

有ル准ルひハ光君ノ御形ハ小似給ハずトあり

と云注有リ此小此神容貌正類ニ天雅彦平生之儀ト有

る類字ト右ノ比字トを對セ考ム可キ所以る者ハ

り然レハ古事記ハ此ハ地ハ何レ吾レ此ハ穢死人ト書シて其誤

者ハ比ハ誤レてりハ事ハ知レめ給ハるハ大葉列ハ下ハ

切
六初ハ後所御佩シ
十初ハ初御杖ハ目ハ表
尾ハ有テ下ハ其持
所功ハ大ハ各記シ

刈此云我里と見え私記ハも於保波加利ハ注せり古

事記ハ小矢量トと書シ此ハたハ不レ正字トハ見えたりけり

通證ハ大葉大刃也刈與ハ雜同意ト注せりハ猶心行

ず此第一二書ハ小ハ此劍ノ事ハ十握劍ト出たり此を

一ハ合せて天神本紀ハハ則ハ技所帶ハ十握劍ハ名大葉

刈き云り偕大量ト云所以ハ一ハも古語拾遺ハ天御量

と有て細書ハ大小ハ雜器等ト云ふ本注有り即傳十

九二百八十四丁廿三百五十八丁小注るが如く上世ハ鏡ハを造

るハも劍ハを造るハも屋ハを造るハも皆ハ稱量ハを被用た

るハもて八咫ト云ひ十握ハ握ハるハも其身ハを以て量

八尋殿ふどら本より其御手を廣げさせ給へり
 小起れる祢あり若て口訣小十握以四指計十也口有
 る如く八握ハ八掬九握ハ九掬十握ハ十掬と
 るを刀の長大此を限と爲て止む事ある故小
 大量とハ云ありけり後の令條の法ハ小大介小介と
 云有て小きを小量と云ハ大あるを大量と号らるるを
 以て也辨知るる可き事あり和名抄稱量具小權
之楊氏漢語抄云權衡加長波可利と云ハ又造作具小
準繩漢語抄云準繩美豆波加利と云ハ有るを以て量ハ
正字葉刈ハ借字○神戶劍ハ古事記ハ神度劍作
 此たの神名劍式小越前國敦賀郡天利劍神社と申す

御在り坐り此品依て利劍ある事を明く可く又越
 中國新川郡神度神社見ゆ此あて神度と續く由ある
 をも思ふ可く借劍類小利と云ハ大袂詞小彼方之繁
 木本子燒鎌乃敏鎌以ハ打掃事之如久古事記美夜受
 比賣の歌ハ斗迦麻迹佐和多流久昆と有ハ於利鎌眞
 度杖ハ鎌小編て杖の利く刈らる計の事を云あり
 万葉十八十七小夜岐多知字刀奈美能勢伎ハと有ハ
 燒大刀を磨と云小係ハ又利の義を思ハせた
 る可く十一二十五小安佐欲比爾祢能未之奈氣婆夜伎
 多知能刀其己呂毛安礼波於母比加祢都毛と有ハ正

一く焼大力の敏捷ある意小續けさせ給へる者あり
然して此小神戸劔と云ふ其大力を号けける所以
天稚彦神の爲小喪會者の力を盡し土木を焼めて心
の限り造り置ける喪屋をりも速小斫臥させ給ひ
由小依ての事と見えたり然る時ハ神戸之と之の言
を授けず直小引續けて神利劔とハ訓べきありけり
通證及記傳共小出雲國ハ神門郡と云有を思めり
く引れたれども其劔の出所を以て号ける可キハ非
ず其風土記ハ所以号神門者神門臣伊賀曾熊之時神
門貢之故云神門と有て神代の古小係て云べき地名
小ハ非 諸上二百九 小注るが如く此時の殞所ハ
飛彈國荒城郡荒城郷あり小就と思ひ寄れり又ハ

右の新川郡神度神社如何おも由有けり同郡の位
山の南面ハ其古荒城郡ありけり小万葉十七 九下 小
尔比可波能曾能多知夜麻尔又 四下 安麻曾之理多可
吉多知夜麻と有て本名大カ山あり今も其峯をハ劔
峯と云ふ小夫大集小山を斫る劔を峯小残し置て神
進小ける氣比の古官と云哥有て山を斫る劔と云事
此小喪屋を斫外給へる事小由有て思ゆるを土人
説小立山神昔ハ滑川の西の某村と云小賀茂宮と云
有て本ハ其所小御在し坐けると云ふ小就てハ予ハ
考の証ざる事を知小足れり云ハ古事記小比之阿

遲鉏高日子根神者今謂迦毛大御神者也と有る証の
有を以るめ又右小謂ゆる氣比の古宮と云い或説小
立山の麓僧房の有邊今も氣比宮と云ふ小祠有
と云り又其小就て考ふる小右の越前國敦賀郡天利
劍神社兼和七年八月乙酉奉授越前國從三位勳二等續後紀無位天利劍神從五位下氣比大神之御子と所見たる小子
孫の謂ふ非ず其屬社の限本官の御子神も申す事
中古の例あれ此立山より後小越前國勸請し
氣比神社の枝社と祀へる由小縁て本の立山此も
其氣比神社を勸請め麓の古小祀へる者あり也と
右小引る哥小依て其説を得る事あり立返所其新

川郡神度神社の御在坐す所縁少や有る和名抄
郷名小新川郡布留佐比味佐比の二有り布留明宮段
歌小母登都流藝須惠布申右有を記傳川日須惠
布田末振みて劍を揮く事あり注されたるみて
明くけく佐比ハ上章第三二書小蛇之韓鋤と云ふ劍
名見元神武天皇戊午年御紀小稻飯命の御事を抜劍
入海化爲鋤持神見えたる是みて其説傳廿六
九小注る如く劍の事を思合す可き事共小
あむ有ける此等の事共より攻て其殞斂の地を飛彈
め云るあり右の如く喪屋ハ裂て南方へ飛て美濃
國より喪山と化め神ハ北へ放りて越中の方へ赴り

三良海本より三則所引
と作り前の進に義を
るより口訣本より所引
と作す

せ給へる者 ○斫私喪屋ハ壯記小毛也字支利不須と
と見えたり ○斫私喪屋ハ壯記小毛也字支利不須と
と有り第一一書ハ斫倒喪屋古事記ハ七切伏其喪
屋と有て字ハ異ハして訓ハ此と同ホキ所あるハ其
八十神段ハ切伏大樹と有ハ如ク斫割き倒て給へる
ありけり此の状ハ神出生章第十二一書ハ是時月夜
見尊忿然作色曰穢兵部兵寧可以口吐之物敢養我乎
迺拔劔擊殺と有ハ似たり此味相高彦根神ハ一も傳
廿六 百 十 卅 十 百 十 小注るハ如ク諸國ハて山を劈
鑿り水流を通して國土を造りて給へりハ大神ハて
渡りて給へりハ其御怒の甚ハきハ及びてハ何討の

御荒びハ有けむ甚怖ルハ事共あて例ハ天より
降乘坐ハ神も御在り坐つめど抑留しる事ハ
至るざりけり 古事記ハ須佐之男命の御事ハ故其
所寢大神聞警而引休其室と有ハ其
だハ可畏き事ハてハ在りけり其ハ御子を愛し
所思すハ出て怒坐るハ非るハ故ハ唯引休し給へる
のハ其ハ此ハ其御荒ひ
ありけりハ殊更ハしころ ○此即落而爲山身一書
ハ其屋瀆而爲山ハ例の天上の事と爲るハ故ハ天
上あてハ屋ありハ物の落下りて山と化ぬる由あり
爲字ハ化字の義ハ見る可ハ古事記ハてハ同一國土
の中よて在り傳の趣あるハ故ハ以足蹶離道ハ書さ
はたり記傳十三 六十 小久惠波都知夜理伎ハ訓ハ

離ハ放字の意少ク何處ハ在ル往ルハ棄遣る少ク
一ハ合たる物を分離ハ意ハ非ズト云ハたるカ如
ト己ハ瑞珠盟約章ハ蹈堅庭而蹈股若沫雪以斃散ト
云語有テ傳十五百五十八丁ハ注セラルカ斃散ハ俗ハ云
ハ斃散ハ事ハ此ハ其義ハ異ある可クハ
帝王編年記ハ霜速比古命男多ク美比古命是謂夷服
岳神女比依志比女命是夷服岳神之姊在於久惠峯也
次淺井比咩命是夷服岳神之姪在於淺井岡也是夷服
岳與淺井岳相競長高淺井岡一夜增高夷服怒拔刀斂
殺淺井姬之頸墮江中而成江島名竹生島其頭字ト云

事の見えたるハ刀斂を以テ姫神の頸を斬たるハ江
中ハ墮テ一島ト成ル傳あるハ此ハ同國ハての事
あるハ墮江中ト云ウ又久惠峯ハ(原)斃峯ト云事(有)ル
彼此合せて思ふハ此の其喪屋を斬伏せ給いつても
虚空ハ斃散ト上たむハ他所ハ至りて必墮下る
可クハけねハ此文ハ御紀あるハ二共ハ天上より降ル
る意ハ見ずても必然る可クハ所思えたるハ此事ハ色
又竹生島縁起ハ出たるヲ殊ハ委一キカ故ハ石の
如ク編年紀を引るあり此ハ喪屋の山ト化ルハ相
似たる事あるヲ以テ右の斃字を靈異記ハ左
支ト訓を注セリ然レハ右ハ引リ夫木集の山を斃
ク斂を峯ハ残一置テ云ハの哥ハ由有リ此の御勢ハ
テハ喪屋のト云ハ在ベリテ其園陵の地ト云ハ

割せ給へるこ
思しきあり
三野こも書り名義ハ眞野ある可しと注されたるハ
然る説して當國ハ某野と云る地名多ク先和名抄郡
名ハ大野於保乃有御名ハ多藝郡立野不破郡野上眞
野本巢郡美濃山縣郡片野あり見えたるハ此ハ其本
巢郡より起りて一國の名と成れるありけり其成れ
る所以ハ古事記伊邪河宮段日子生王の御子等守せ
て十一王坐る中ハ次神大根王者三野國本巢國造長
幡部連之祖と有て此時已ハ本巢國造の号有り然る
ハ國造本紀ハ三野前國造春日率川朝皇子彦坐王子

ハ命定賜國造と所見たる此ウ神大根王又名ハ命
入日子玉王と有れハ其本巢國造あり右其美濃郷の
地ハ住給ひけむく其地名の廣ウりて一國の名と
成り終前ハ美三野國造と呼ぶ事ハ成りけむと思
ゆるウり
備前字を用ひたるハ次ハ三野後國造志賀
高亮總朝御代物部出雲大臣命孫臣賀夫良
命定賜國造と有る後字ハ對たる者あるハ當昔此國
を分りて道口道後と別て一國ハ一て二國造を置せ
給ひし者
○藍見川之上ハ古事記ハ藍見河之河上
と所見たり口訣ハ藍見川厚見郡也と師見ハ然るハ
和名抄郷名ハ不破郡藍川と有り美濃國百莖根と云
物石不破郡藍川垂井之東と有て關藤川黒地川と

皇紀天皇二十五年御
 紀の語の藍野
 和名抄の攝津國島
 下郡安富郡に有る
 御名して藍草を生
 る野をいふ語を
 と合せて思ふ可き
 なり

三川多良川と落合て多藝郡粟笠船渡の所して一
 爲る由云此ハ土人の説あるハ慥ある可く所思ゆ
 又其不破郡ハ藍川山と云る有り決めて其川上る
 可一又通證ハ不破郡府中村藍川是也と云此ハ口訣
 小云るハ京ふての説るハ信む可くざるあり名
 義ハ藍水と云車りと思ふハ然計の大川ありざれば
 水色を以て号く可くず字の如くして藍草の所
 小見ゆる地名の謂ある可一若て藍と云ハ何ハ依ず
 漆色の名あり和名抄ハ揖保郡河爲山品太天皇之世
 紅草生於此山故爲河爲山と有ハ紅花の事ありむ

一葉三三十一小吾屋戸ル幹藍種生之七三十一小吾時之
 韓藍之花年十一五五十一小三苑圃能幸藍花之
 色出尔来十一四十一小三苑原之鷄冠草花乃色二出自
 八方とも詠て和名抄漆色具小紅藍辨色之成云紅藍
 久礼乃 吳藍如本朝式云紅花俗用と云る是あり紅草
 阿井 在打任せて河爲と云を以て漆色の称稱る事を知べ
 本草和名小藍實木藍子葉圓 菘藍爲 蓼藍不堪 和名
 阿爲乃美又和名抄小藍附 藍澱 唐韻云藍魯井 漆草也澱
 音殿和名 藍澱也本草云木藍堪作澱也木藍和名 都波
 阿井之流 蓼藍多无 見本草と有ハ此ハ苟子ハ青出之藍而青於
 阿井

藍と云る物ふて今専せし謂ふ青碧色を阿爲と云る
 是るり此ふ依て阿爲の阿表の轉なること云るハ一
 偏の論と云べし武藏風土記に隅田川の事を藍田川
 と書り藍を^ハ里の色ふ富たりける者を^ハ玉勝間
 万葉集哥久礼奈^ハ傳を^ハ加羅阿爲とも詠ゆ抑久礼奈
 爲と云ハ此物本吳國より渡參て来る由ふて吳の藍
 と云を^ハ切めたる名ふるを^ハ其ハ韓國より傳つ故
 又韓藍とも云るありと云れたれども石の阿爲山
 自然生の由あり然れハ其應神天皇三十七年御
 紀小遣河知使主都加使主於吳令求縫工女云^ハ於是
 與工女兒媛^ハ媛吳織穴織^ハ女と有て其四十一年
 小歸來れり吳人の來れるハ此始あるを^ハ其參て^ハ頃
 天皇崩坐^ハ後の事あるを^ハ風土記の傳ハ御在世の
 時の事あるふこく紅車^ハ阿爲と云名有を^ハ思へハ其
 吳人の始て製法を^ハ教る^ハ爲け^ハじ^ハ吳藍とハ云る
 めり本此ふ在^ハ物^ハの彼より來れる者と成れるハ此

紅藍と茶のニ
 のこず有ける ○喪山ハ百莖根ふ不破郡藍川山と云
 る有り如何ふも藍見川の川上るるを以て然るなりと
 聞ゆれハ決^ハく喪^ハ上^ハ是る^ハ可^ハ一通證^ハ不見^ハ林曰^ハ喪山今
 僧都山訛^ハ喪言也今按或曰藍川之上有送葬山と云る
 送葬山ハ即藍川山の一^ハ名と所見たり又百莖根ふ本
 巢^ハ郡波伊保宇志山^ハと云有て其山高^ハく^ハずと雖も越
 前の境の道故ふ其名高^ハくと云り掃^ハ廢山^ハと云事ふて
 此の其時の片方あり^ハしや又武儀郡喪山大矢田村
 ふ在と云も此の喪山と同名あり同郡水成山と云有
 も飛彈國大野郡水無神社ふ下照姫命の在と云ふ就

ても此喪山が真ありむと所思の計ありけり如北く
是あり其と思合せり三所迄有る就て思へり
ハ古事紀ハ蹶離遣と有り此ハ所ハ喪屋と見えたり
ハ其喪屋の全くあり非ず條ハハ碎散けしと思
れハ其山も一ハて在へきハ非れハ正史ハハ不破郡
あり藍見川の川上ありの傳ハれりハて其實ハ右
の二山ハ猶外あり在けむを其本説を失ふる者
る可くハ所思えたり又方葉九十六ハ母山霞棚引左
夜深而吾舟將泊等萬里不知母と有り母山をハ雲御
抄ハ美濃國と書させ給へる此ハ大喪山と云事あり

此等も其碎散たりけむ其ハハて有ぬ可き凡てハ
美濃全國ハ且ハ故事と知べきあり其神名帳ハ從五
位下布賀利明神と申す有ハ布賀利と量と相通ハ從
五位下都留岐明神同事忌神と見えたり事忌ハ亡者
ハ誤てるを忌思ハせ給へるハ當る可く傳三十一
下ハ注るハ如く尾張風土記ハ夢有神告曰吾多具國
神名曰阿麻乃弥加都比女吾未得祝若爲充得祝人中略
日置部君等祖建岡君ハ食即遣覓神時建岡君到美濃
國花鹿山攀賢木技造縵云と有ハ神名式ハ大野郡
花長神社花長下神社二社御在ハ坐を其女神ハ味報

仁天皇二十三年
御紀より生人と云
事二所より出たり

高彦根神の後御掬日女命小坐し由有り其社味
相高彦根神小坐し下社其女神小坐す事己云
か如し又同郡小杭瀬川と云有少杭久此梅久伊
少て違へれども若くは梅瀬川ありや又其喪山
の在る武儀郡も神名帳正三位劔明神と申す
見えたるも此彼思合す可き事共ふる有けり記
小云く万葉九小母山小霞棚曳く云と有ハ雲御
抄小美濃と有小就て此喪山ありしと契沖云り此哥
ハ近江湖少て舟あり見放て詠るあり美濃ハ隣國
ありと猶物遠く聞ゆ云と云此たれども喪山ハ右
の如く數處小巨り事を
思ひ漏されたる者あり
○生を伊祁流比登と訓る此
ハ第一書小己字を書れたる其如く少て自の上を

云所あり万葉三五十一小生者死云事尔不死免と有る
生者ハ正しく然訓へき所あり四十二小生日之爲社
妹字欲見欲爲礼又四十四生有代尔吾者未見六十九小
間使裳不遣而吾者生支奈重二九三小幾時毛不生
物乎十一小雖生吾迹應依人云名國又雖坐吾念妹
安不相又十五吾情利乃生戸裳名寸十一小生代尔
戀云物乎又二十旦露之命者生有又二十四念度者生跡
文奈思十三小吾命乃生極又二十生友各擊社吾恋
度七月十六二十小瘦く母生有者將在乎十八十七小
可久古非須良波伊家流思留事安里ると其外の證共

右三百八十四丁生平の條引るが如し命と云ふ氣内と云

事して氣息の通ふ間を云ひ生いハ氣有少て氣息を身

小有りて生活く間を云称祢ある事人の知れるり如し

和訓聚小伊伎氣息を云ふ神代紀小見ゆ生の義あり

韓詩外傳人得氣則生失氣則死之所見たゆ云此云此云此云

又伊能知命を云ふ氣内あり可一大集經小息出入名

為壽命一息不還即為命終と見えたりと云此云此云

○死ハ第一書小如何誤死人於我耶又此と曰小其

所小惡以死者誤己と書され古事記小何比穢死人と

有ると小依て志述昆登と訓べ一其ハ記傳十三六十

小云小此云か如く垂仁天皇三十二年御紀小天皇詔

群卿曰從死之道前知不可今此行之葬為之奈何於是

野見宿祢進曰夫君王陸墓埋立生人是不良也略以是

土物更上易生入樹於陵墓為後葉之法則と有其此云此云

人小對へる所あるが故小死字を死人の如く訓る事

右小生字を書て生人の如く訓せたると一事あり雄

略天皇十三年御紀小伊能致志備磨志佛足石哥小志

牟乃於保岐美都祢亦多俱霸利万葉三三十小宇礼牟

曾此之將死還生四三十小念西死為物亦有麻世波千

遍曾吾者死喪益九二十小死毛生毛君之隨意十一五

小惡為死為物有者我身十遍死反又十三死死公依又

二十小所殺鴨將死十六九死者木苑相不見在目生而

六丁

在者又死藻生藻同心跡多し古今共小易事無くして云言あるが志奴とい氣往と云事なり右亦も云る如く命ハ氣内生ハ氣有の交あるあり凡て予が死生の本説ハ甚く深遠キ旨を探りて上件條ハ注れハ今云限ハ非ずと雖も此ハ唯其言を以ッ解たるの^{本ハ右の生字た伊祁流比登と訓るが此を麻加礼流比登と訓るハ傳事ハ非れども常ニ伊伎志述ニ並べ}○惡を伊年と訓じ事ハ傳十九^{ニ百}云例ハ違へり^三忌部の注ハ云りハ如く神事などの清より方^三就て職ハ物忌又ハ忌鍛治忌と云ハ居ハ齋殿齋柱齋藏と云ハ器ハ忌斧忌刀あを云る類ハ其慎一

この嚴クヤ一^ハ重キハ故ハ不浄を忌避る由あり又四神出生^{章第}六二書ハ今世人夜忌^二片之火又夜忌擲掃此其縁也と見え宝鏡開始章身^三一書ハ自^下以^ル来世諱著^中萱蓑以^上他人屋^内又諱^負束草以^中他人屋^内内有^レ犯此者必債解除此太古之遺法也と書され此ハ世人惡^レ以^レ生誤死此其縁也と有る類ハ一度其事の有^ルつゝか決めて不祥なり^一所以を以て永く其^レ同^レ事^レの出来^ルを深^ク憎^ミ避^ルる由あり右の清ありりたる方ハ云ル終^ニ同ト趣ハ歸^めの^一万葉四^三十^四十^五ハ千^三磐破神哉將離空蟬乃久歟禁良武と有て^{イム}避^ルと忌^トを

並心擧ると以味いふ可し十三十八ハ小吾念有妹尔縁
 而者言之禁毛無在气常と有ハ事之忌よて「忌」き事
 と避り謂ふり其十一二十ハ小氣者神毛悪爲と有て伊
 咄いこ思むと其義義の近きを先此小心得べき事あり
 竹取物語小月の影見ると忌む事と制しければ小
 町集小月の甚哀れあるを見て寐む事とす口惜ゆれ
 と箕貝子小眺れハ男忌ある者と云へハ源氏紅葉
 賀十ハ小余りぬる人ハ雖遊びハ忌侍るなり枕草
 子十二ハ十四ハ其所して物食ふこと甚悪つけハ食する
 人も甚憎と云く忌たるやハ口を塞ぎて顔を以退

く可きハ非ぬハあるど有ハ何れも其事を悪して忌む
 といえらるなり 其外ハも源氏夕貞ハ忌む事の驗ハ蘓
 て其驗驗ハ蘓生りたれハ神卷ハ山の座主召て忌
 む事受給ふ可き由宣ハす柏木ハ然ハ如此物ハた
 る序ハ忌む事受給ハしを云くあるど有ハ佛家ハ云ふ
 受戒の事あるハ其も物を忌慎ハ戒ハむる意ハ石
 同ハ諸皇祖天神の天地を初て立給ハ二柱御祖神
 の國土万物を生成ハ給ハ天照太神の高天原より照
 臨よせ給ハ須素彥鳴尊の月神と坐て夜之食國を所
 知食ハ風火金水土神の相賃けて万物を蕃息ハ令給
 事ハ國土ハ人類を住ハめ其生を一日も長ク
 令保給ハ神事ハて御在ハ坐ハ故ハ入ハ更ハも云ず

禽獸虫魚草木土石乃至有情無情世も
永く在む事を希はざる物天地の間も於て何れも
非りける故世を樂しむ死を惡む事實も天地神祇
の大道あり所以齋宮式も凡忌詞内七言佛稱中子
經稱漆紙塔稱阿良岐寺稱瓦菖僧稱髮長尼稱女髮
長齋稱片膳云々又別忌詞堂稱香燃優婆塞稱前等と
有て伊勢神宮の作法も平日其詞も云をたも忌せ給
ひて各言を換て云ふ習俗あり此佛も蕃客神ありて
甚^卑卑^卑き然る者もて殊も生存の事を輕くし死後
の事を重くする法ありて異端の甚^卑き者ありはる

り又外七言死稱奈保留病稱夜須美哭稱鹽垂血稱何
世打稱撫冥稱菌墓稱壞と有て此等も常も在る事も
して絶て遁る可くざる事ありども其言も云をた
も惡くせ給へり况て其實事も至て^{此と汚穢と爲給へり}右^{四百}よ注せ
る神祇令穢惡の義解も穢惡者不淨之物鬼神所惡也
と有て深く忌憚る事もて神官及大社も申し及ばず
朝廷の御神事も其御禁の御制ある事人の知れる
か如く播磨風土記も神前郡生野所以号生野者昔此
處有荒神半殺半殺往來之人由此号死野以後品太天
皇勅云此爲惡名改爲生野と有て地名もす死と云

高麗府
文庫

圖書
印
文庫

を惡よせ御在り坐て生と改させ給へるを以て其
禁を犯す可くさる御事共して是即朝廷より天下
を御めさせ給ふ道る事をも明くめ奉る可きなり又
大後詞ふ天下の人民の事を國中亦成出年天之益人
等々令宣給へり即古事記事戸段ふ謂ゆる是以一日
必千人死一日必千五百人生也と云ふ御言を今日の
大御政ふ用ひさせ給へり御事ふて仰奉る事も銚有
りて尊く辱き神と皇この大道の本旨此ふ在る事ふ
りり斯む此ふ味相高彦根神の振延て其喪を弔
りいふ御在り坐りし引替へせ給ひて其御怒の強

